

短 報

富山県におけるイトゴケの記録

坂井 奈緒子

富山市科学博物館

939-8084 富山市西中野町一丁目8-31

Records of *Neodicradiella pendula*  
in Toyama Prefecture, Central Japan

Naoko Sakai

Toyama Science Museum

1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama 939-8084, Japan

1. はじめに

イトゴケ *Neodicradiella pendula* (Sull.) W.R.Buck は、本州から九州、中国、北米南部、メキシコに分布し、木の枝等から垂れ下がって生育する蘚類である（岩月編, 2001; Noguchi, 1989）。南方に多く生育し、日本の生育地の北限は、太平洋側では茨城県久慈郡大子町八溝山近くの林道（高橋・古木, 2016）、日本海側は新潟県加茂市上条（白崎・櫻井, 2010）である。環境省による絶滅危惧種の指定はされていないが、富山県を含めた2府10県において指定されており（NPO 法人野生生物調査協会・NPO 法人Envision 環境保全事務所）、富山県でのカテゴリー区分は絶滅危惧Ⅰ類である（富山県生活環境部, 2012）。「富山県の絶滅のおそれのある野生生物」（2012）では、魚津市の1カ所のみで本種が確認されている。その後、2014年に小矢部市での生育が見つかり、また、2016年に高岡市で本種と思われる採取品が著者に届けられ、同定した結果、本種と確認でき、富山県内の生育地は3カ所（Fig. 1）となった。魚津市の生育状況については、「富山県の絶滅のおそれのある野生生物」（2012）の記述が既報となるが、本稿では県内3カ所における発見時の生育状況、2023年秋に各生育地を調査した際の生育状況を報告する。

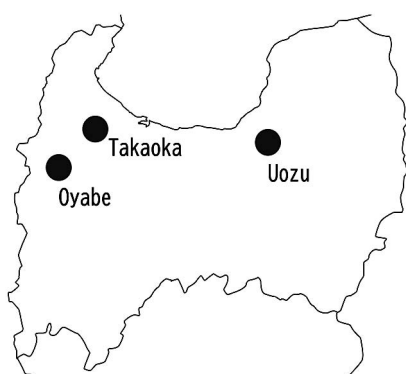


Fig. 1 The growth sites of *Neodicradiella pendula* in Toyama.

2. イトゴケの生育状況

イトゴケが生育する富山県の3地点は、いずれも丘陵を蛇行する谷にあり、本種は水流近くの疎林内で生育していた。生育地の光環境は、谷地形やスギ *Cryptomeria japonica* によって被陰され、いずれもほぼ日陰であった。着生基物は、高木のスギや低木のヤブツバキ *Camellia japonica* などの枝であり、細長い茎葉体が垂れ下がっていた。採取した全ての標本において胞子体は見られなかった。

以下に、生育地毎の生育状況等を記す。なお、地名については保護の観点から市町村名までの記載とする。

2.1. 魚津市 標高240 m

2010年4月7日に、車道脇の数メートル下方を流れる小河川の岸边から斜面で、疎林をつくる高木の枝に着生し、垂れ下がっているイトゴケが豊富に見つかった（標本：TOYA-Br6490）。疎林をつくる樹種は主にスギであり、本種はスギやサワグルミ *Pterocarya rhoifolia* の枝に多く着生していた。小河川は生育地付近で、西から北、北東へと蛇行しており、谷のカーブの内側、約80 mの区間に本種の生育が確認できた。

2023年9月21日に再調査をしたところ、生育している環境に変化はなく、生育は良好であった（標本：TOYA-Br8207）（Fig. 2）。

2.2. 小矢部市 標高50 m

2014年6月15日に、小河川の幅広い滝地点より約10 m下流で本種が見つかった（標本：TOYA-Br7139）。生育地付近で小河川は北東方向に流れ、左岸の岸边近くからやや上方の斜面には低木のヤブツバキや高木のスギ等が生育し、本種はそれらの枝にまばらに着生して垂れ下がっていた。生育区間は約40 mであった。小河川の両岸は林となっており、左岸の約20 m上方には車道がある。小河川は蛇行し、滝地点から約100 m下流では南方向へ曲がっている。

2023年9月29日に再調査をしたところ、小河川に沿った車道は、2023年7月の大雨で道路の欠損、のり面崩壊等により車の通行はできなくなっていた。車道から滝の近くへ降りる歩道、イトゴケの生育地付近の小河川や岸边では、土砂崩れ等の大雨の影響は見られなかった。本種の生育状況は変わらず、まばらに枝に着生し、垂れ下がっていることが確認できた（標本：TOYA-Br8222）。

2.3. 高岡市 標高30 m

2016年3月27日に、南東から南西へ曲がる小流の脇に生育するスギの枝から垂れ下がっている本種が、俵京子氏・木内静子氏・大原隆明氏によって発見され、本種であることを著者が確認した（標本：TOYA-Br7499）。生育地は車道脇の浅い谷で、谷を流れる小流と車道の間の斜面に、スギが小流に沿って並んでおり、その枝に本種



Fig. 2 *Neodicradiella pendula* hanging down from the branches of Japanese cedar in Uozu, on 29th Sep. 2023.

が着生し垂れ下がっていた。生育区間は約30 mと短い、スギの多くの枝にイトゴケが生育していた。

2023年10月23日、11月19日に再調査したところ、土手と石積みの護岸であった小流は、三面コンクリート張りに改修され、イトゴケが着生していたスギは伐採され、直射日光が差し込む場所となっていた。本種の生育は確認できなかった。

### 3. 考察

富山県内におけるイトゴケの生育環境は、曲がった谷地形、蛇行する水流、スギの疎林が共通し、着生基物は主にスギの枝であった。枝から垂れ下がって生育する本種において、高い湿度環境は重要であり、生育地は地形や林、水流によって空中湿度が高いと考えられる。

太平洋側の北限となる茨城県太子町八溝山の生育地では、本種は溪流沿いの樹枝から垂れ下がり（高橋・古木, 2016）、同県城里町の生育地は、三方をスギなどが植林された山に囲まれた谷状地形であり、本種はチャノキ *Camellia sinensis* やサツキ *Rhododendron indicum* などの枝に生育する（鵜沢, 2015; 杉村, 2020）。栃木県鹿沼市の生育地は、茨城の生育地とほぼ同緯度にあり、小河川が流れる谷沿いで、本種は主に比較的明るい場所の植栽された低木に生育する（富永, 2012）。日本の北限となる、新潟県加茂市の生育地は、比較的狭い谷間、川の兩岸のスギ林である（白崎・櫻井, 2010）。茨城、栃木、新潟、富山の生育地は谷地形や水流沿いであり、空中湿度が高い環境と考えられることは共通する。新潟県では、スギ林の枝によく着生しており、富山県魚津市の生育環境にやや似ていると考えられる。

本種は2010年から2016年の間に、富山県内で3カ所の生育地が見つけたが、高岡市の1カ所は2023年の調査では生育が確認できなかった。その生育地は、水路の改修とスギの伐採により着生する木がなくなり、空中湿

度が低くなったことから、本種の生育に適さない環境となったと考えられる。本種の消失要因には、道路改修と乾燥化があげられているが（富山県生活環境部, 2012）、谷地形の変化、流路の変化や改修、スギの伐採や倒木といった自然災害や開発も追加すべきと考えられる。2023年に生育が確認された2カ所も、安定した生育地とは言えず、継続的な生育調査が必要である。また、新潟県では2009年9月6日に若い胞子体、11月21日に成熟した胞子体が観察されているが（白崎・櫻井, 2010）、富山県内では、胞子体が見つからない。県内の生育地において、胞子体形成の調査が必要である。

本稿で記したイトゴケ生育地と同様の環境は、富山県内の低山に点在することから、今後調査を行うことで、新たな生育地が見つかる可能性があると考えられる。

### 4. 謝辞

生育情報とともに標本を寄贈いただいた俵京子氏、木内静子氏、大原隆明氏（富山県中央植物園）にお礼申し上げます。

### 5. 引用文献

- 岩月善之助（編）、2001. 日本の野生植物 コケ, 355p. 192 pls. 平凡社.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated moss flora of Japan. Part 3. pp. 680-681. Hattori Bot. Lab.
- NPO 法人野生生物調査協会・NPO 法人 Envision 環境保全事務所、日本のレッドデータ検索システム イトゴケ. <http://jpnrdp.com/search.php?mode=map&q=1001160100341>. 2024年1月10日閲覧.
- 白崎仁・櫻井幸枝, 2010. 新潟県加茂市の垂下状コケ植物イトゴケ（蘚類）. 長岡市立科学博物館研究報告, 45: 49-54.
- 杉村康司, 2020. 茨城県央部および鶏足山塊周辺の蘚苔類(2012-2014). 茨城県自然博物館第Ⅱ期第3次総合調査報告書, pp. 23-41. ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 高橋雅彦・古木達郎, 2016. 茨城県八溝山の蘚苔類. 茨城県自然博物館研究報告, (19): 93-103.
- 富永孝明, 2012. 栃木県鹿沼市石裂山周辺のキョスミイトゴケとイトゴケ（ハイヒモゴケ科）. 栃木県立博物館研究紀要報告. 自然, (29): 9-14.
- 富山県生活環境部, 2012. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックとやま2012—, 452p. 富山県生活環境部自然保護課.
- 鵜沢美穂子, 2015. 県内初記録?! 清音寺のイトゴケ. A・MUSEUM, (82): 5.